

かに物のあはれもなからん世は定なきこそいみじけれ命ある物を見るに人ばかりひさしきはなし、かげるふの夕をまち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし、つく／＼と一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや、あかすおしと思はゞ、千とせを過すとも、一夜の夢のこゝちこそせめ、すみはてぬ世に見にくき姿を、まちえて何かはせん、命ながければ辱おほしながぐとも、四十にたらぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ、其ほどすぎぬれば、形をはづる心もなく、人にいでまじらはんことを思ひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、物のあはれもしらすなり行なんあさましき、

定命

〔明良洪範續篇九〕石田三成生捕ト成テ京都ニ於テ誅セラレシ時、其途中ニテ湯ヲ乞シニ、折節其邊ニ無リシカバ、警固セシモノ、湯ハ只今求メ難シ、咽乾カバ、爰ニアマ干ノ柿ヲ持合セタレバ、此ヲ喰レヨト云、三成聞テ、夫バ痰ノ毒ナリ、食スマジト云ニ、聞ク人大ニ笑ヒテ、只今首ヲハチラルル人ノ、毒忌スルコソオカシケレト云シヲ、三成聞テ、汝等如キ者ノ心ニハ尤也、大義ヲ思フ者ハ、假令首ヲ刎ラル、期迄モ、命ヲ大切ニシテ、何卒本意ヲ達セント思フ、故成シ由申シキ、

〔蓮歩色葉集地〕定命

〔日本書紀十一〕四十一年二月、譽田天皇○應神崩時、太子菟道稚郎子讓位于大鷦鷯尊○仁德、未即帝位、

略○中 爰皇位空之、既經三載、略○中 大鷦鷯尊聞太子薨、以驚之、從難波馳之、到菟道宮、略○中 太子啓兄王

曰、天命也、誰留焉、略○下

〔日本後紀十三〕延曆二十四年八月己未、常陸守從四位下紀朝臣直人卒、略○中 爲人温潤、略○中 終以天

命卒、時五十九、

〔台記〕康治三年○天養元年三月十七日戊辰、大夫史政重宿禰卒、行年五十有二、忠直兼備、天命不長、伯夷

以仁飢之類是也、識者以爲、近者大變頻見、政重天亡之兆矣、政重即世、官中可衰凌之故也、